

西一本柳遺跡一帯の弥生後期集落の変遷  
— 長野県佐久地域北部の一例 —

2014. 10

小山岳夫



# 西一本柳遺跡一帯の弥生後期集落の変遷

## ー 長野県佐久地域北部の一例 ー

小山 岳夫

### 1 はじめに

佐久市北部湯川右岸沿いに細長く連なる海拔680～700mの段丘上には東西1.7kmの範囲に、東から北一本柳・西一本柳・北西の久保・五里田遺跡という佐久地域の古代を代表する4遺跡が連なる。

佐久市教育委員会は昭和57・60年（1982・1985）の佐久市北西の久保遺跡の全面発掘を皮切りに、以後35年にわたり、断続的にその周辺地域の発掘調査をきめ細かく行ってきた（図1）。特に西一本柳遺跡の発掘は、昨年末で20次を数える。その地道な調査の積み重ねにより、佐久地域北部の古代～中世集落が明らかになりつつある。

本稿の目的の一つは、土中から発せられたメッセージの中から弥生後期の遺構・遺物に注目して、当地域の紀元前後から西暦3世紀頃までの社会像の一端を明らかにすることにある。また、もう一つは、行政がきめ細かな発掘調査を継続的に行うことの重要性についてもアピールすることである。

なお、本稿で時間軸として用いる佐久地域の後期弥生土器編年は、先に著した拙稿<sup>（註1）</sup>を用いる。

### 2 西一本柳遺跡一帯の発掘調査概要

北一本柳～北西の久保遺跡は広大な岩村田遺跡群の西部に当たり、地続きで東西に連なっている。北西の久保遺跡と五里田遺跡は支谷を隔てて接している。

北一本柳遺跡は東西450m、南北400m、総面積約18ヘクタールを測り、弥生時代後期後半、過去に4次（同一の遺跡と考えられるが別の遺跡名『宮の前遺跡』が付けられている調査も含めると5次）の発掘調査が行われた<sup>（註2）</sup>。弥生後期後半、古墳後期、中世の集落址が見つかっている。

西一本柳遺跡は東西330m、南北350m、総面積約11ヘクタールを測り、弥生中期後半・栗林2式新に大規模集落が営まれたのを嚆矢として以後、後期前半・後半、古墳時代中後期、奈良・平安時代、中世と断続的ながら長期間にわたって、集落が営まれ続けた古代の佐久地域北部では最も人が集まった痕跡を残す遺跡である。発掘調査は平成3年（1991）から始まり、平成25年まで22年間で20次に及ぶ発掘調査が実施されている<sup>（註3）</sup>。

北西の久保遺跡は、江戸時代初期に開削された常木用水<sup>つねぎ</sup>により、西一本柳遺跡と分断されているが、古代において両遺跡は地続きであった。湯川沿いの東西に細長く伸びる低台地の先端部にあたる遺跡で東側を除く3方向は崖に囲まれている。調査は独立台地のほぼ全面約1.7ヘクタールにわたって行われ、弥生中期後半、後期前半・後半、古墳中後期、中世の集落・墓址が発見された<sup>（註4）</sup>。群馬県との関係が示唆される6世紀代の形象埴輪の出土でも著名である。



図1 五里田・北西の久保・西一本柳・北一本柳遺跡の位置と発掘調査区  
西一本柳ⅡはⅢ・Ⅳとダブる。

五里田遺跡は、北西の久保遺跡と支谷を隔てて西側に接している。約3.5km<sup>2</sup>の遺跡範囲の内、平成9年(1997)に一部が調査され、弥生中期後半の集落址、後期後半の墓址などが発見された(註5)。

以上3遺跡は東西1.7kmの範囲に近接し、東の西一本柳から西の五里田に向かって徐々に海拔が下がる。

### 3 弥生時代中期後半から後期集落の変遷

#### (1) 弥生時代中期後半＝栗林期の集落址

弥生時代中期後半＝栗林期の集落址は、西一本柳遺跡一帯では遺跡面積の約半分を調査した段階で竖穴住居址の総検出数279軒に及ぶ大規模な展開を示しているほか、この場所から西に向かって流下する湯川沿いの約3.5kmの範囲内に大小の集落が少なくとも5箇所あり、当該期の一大集住地となっていたことが明らかになっている(註6)。この集住地が、栗林式土器の終焉を迎える中期末になると一斉に消失し、空白に近い状態となる。そのもっとも新しい段階の集落は、湯川沿いから離れ、西一本柳遺跡一帯の北側にある田切り地形の末端部の枇杷坂遺跡群直路遺跡(註7)(図7中5-2)で確認されている。その後、田切り地形末端部では後期に至ると大規模集落が次々に営まれることがわかっており、中期後半における湯川沿いを中心とした集落経営から、田切り末端部へと集落経営が転換される嚆矢となるのが、直路遺跡の中期末の集落である。

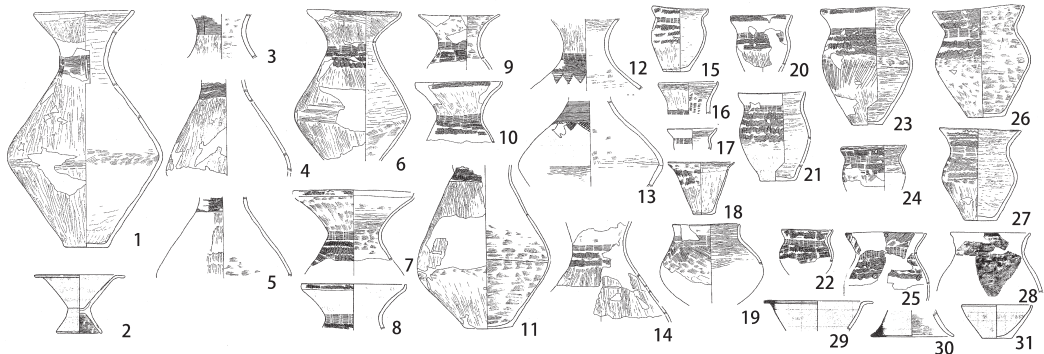


図2 後期Ⅰ期吉田期古の土器群（西一本柳遺跡Ⅲ 1.2=7 号住居址 3～31=41 号住居址）

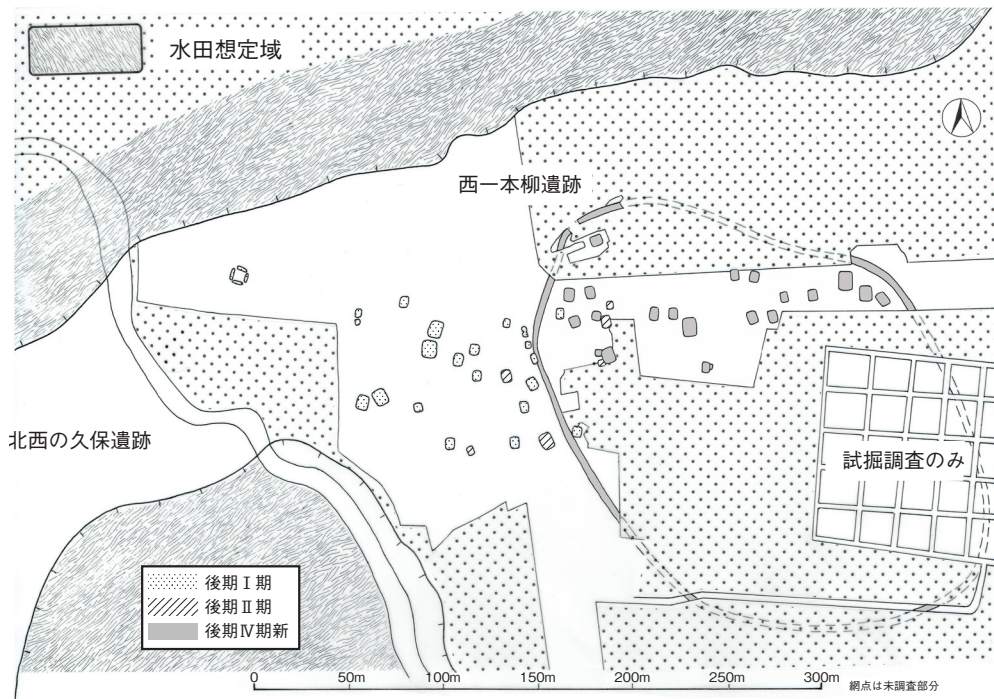


図3 西一本柳遺跡弥生後期集落変遷図

## (2) 弥生後期Ⅰ期＝吉田期前半の集落址

私は過去に長野県佐久地域弥生土器を編年した<sup>(註8)</sup>。その際に当該期の資料は欠落していたが、平成4年から始まった西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳの調査により、空白を埋める後期Ⅰ期の土器と集落址が発見された(図3)。現状で把握されている当該期の遺構は、遺跡の北西部に120×85mの範囲に分布し、竪穴住居址22軒、方形周溝墓1基が検出されている。

竪穴住居址群が見つかった東西両側は未調査であるため、集落の全体像は明らかでないが、総数でⅠ期において30軒程度累積されていたと考えられる。竪穴址住居群の東側はⅠ期の竪穴住居址同志の切り合いがあり、西側には2軒が近接しすぎている箇所が3か所あるため、少なくとも2小期の変遷があったものと思われる。



方形周溝墓は、竪穴住居群分布する範囲から北西側に約 60m 離れた場所に単独で分布している。佐久地域はもとより千曲川流域最古の方形周溝墓である。

### (3) 弥生後期Ⅱ期 = 吉田期後半の集落址

西一本柳遺跡では、この時期になるとⅠ期に比して竪穴住居の分布が東側、遺跡中央に移動する(図3)。Ⅱ期の竪穴住居址は現状で6軒確認されている程度で、竪穴住居群の東側は未調査部分のため全容は測りきれないが、集落規模が縮小しているようにも見える。同時期でこれよりも大きな集落址は北西の久保遺跡にあり、13軒の竪穴住居址が確認されている(図4)。竪穴住居は北東から南側へ屈曲して細長く伸びる台地上に2群の分布が見られ、北側の竪穴住居6軒は楕円状に連なって配置されている。南側の一群は、北部で3軒、中央部で2軒、南部で2軒の竪穴住居が東西横並びで配置されている。

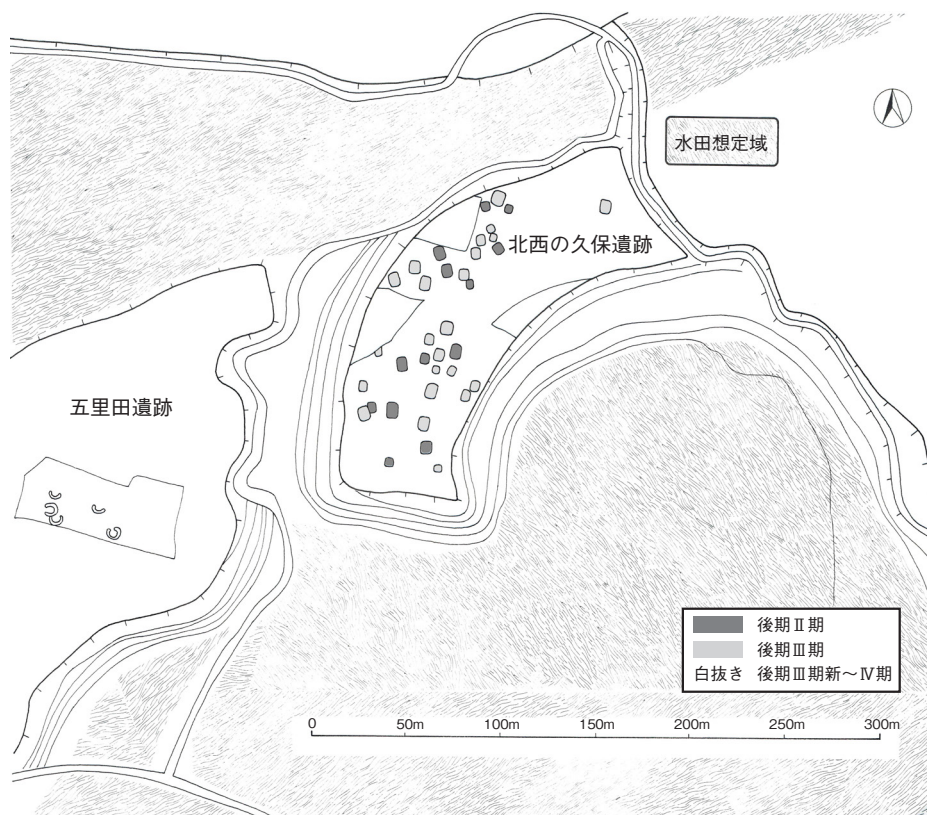


図4 北西の久保・五里田遺跡弥生後期集落変遷図

### (4) 弥生後期Ⅲ期 = 箱清水期前半の集落址

#### a Ⅲ期古の集落址

西一本柳遺跡一帯ではⅢ期古の居住域は空白で、この時期佐久地域北部の居住の主体は周防<sup>すぼう</sup>畑<sup>ばた</sup>遺跡群<sup>(註9)</sup>にあったようである。

#### b Ⅲ期新の集落址

Ⅲ期新に至ると西近津遺跡群<sup>(註10)</sup>を最大として、周防畑遺跡群宮の前遺跡<sup>(註11)</sup>、枇杷坂遺<sup>びわざか</sup>

跡群中の<sup>えんしょうのぼう</sup>円正坊・<sup>しみずだ</sup>清水田遺跡<sup>(註12)</sup>・<sup>かみすぐじ</sup>上直路遺跡<sup>(註13)</sup>、<sup>にしいちりづか</sup>西一里塚遺跡群<sup>(註14)</sup>など田切り地形末端部に大小の集落が肩を並べるように並立するようになる(図7参照)。

西一本柳遺跡一帯の北西の久保遺跡ではⅢ期新を中心とする23軒の竪穴住居が検出されている。竪穴住居の分布範囲は、Ⅱ期同様の広がりを見せている(図4)が、Ⅱ期の竪穴住居址との重複はなく、Ⅱ期の竪穴住居址の窪みを避けるように住居を構築したようにも見える。なお、Ⅲ期の竪穴住居址は一箇所重複、二箇所近接し過ぎているところがあるため少なくとも2小期の変遷があったことが想定される。

Ⅲ期は湯川流域の西一本柳遺跡一帯では、一時的な衰退期にあたるが、田切り地形末端部では史上空前の隆盛期となっていたのである。

### (5) 弥生後期Ⅳ期＝箱清水期後半の集落址と墓址

#### a 集落址

Ⅳ期は、北一本柳・西一本柳遺跡で環濠集落が形成される。両環濠集落は東西に並んでおり、その間は50mしか離れていない(図6-④・⑤)。

北一本柳遺跡の環濠は3次の調査結果を張り合わせると、最大に見積もって東西370m、南北200mの楕円形を呈することが推定されるが、その範囲内にも数条の溝の掘削が認められ、環濠全体が順次拡張された可能性や環濠内部を区画した可能性などが考えられる(図6-⑤)  
(註15)。

環濠エリアの南部を東西に突っ切るように横断したのが第3次調査で、この際に調査区の西部、環濠エリア内では南西部にあたる場所から、南北長は推定で14.22m、東西長7.47m、

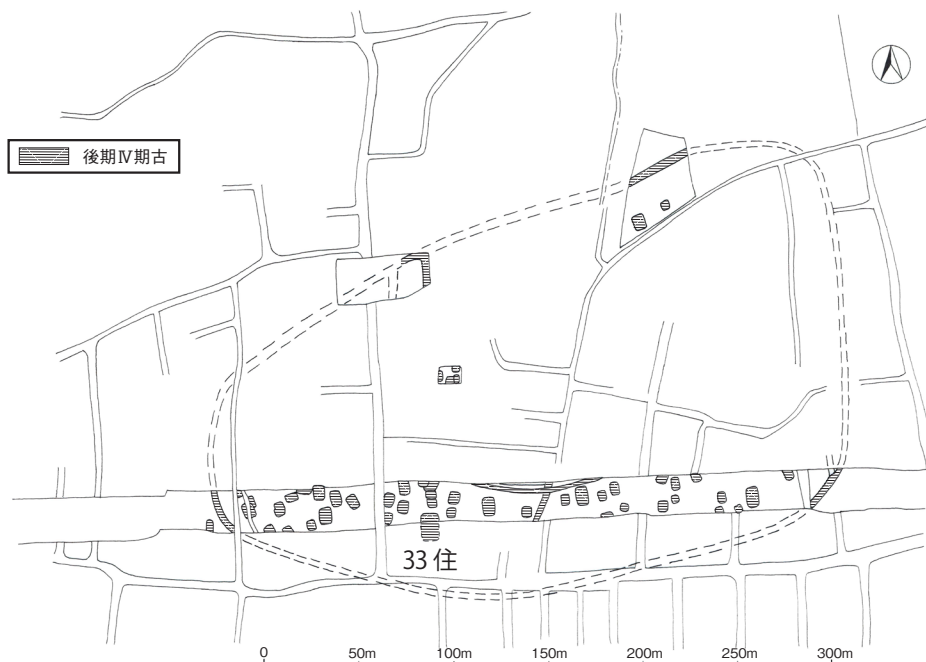


図5 北一本柳遺跡弥生後期集落址

推定床面積 106.22 m<sup>2</sup> の大型住居址（33 住）が発見された。おそらく北一本柳遺跡の後期Ⅳ期の堅穴住居の中では最大級の規模であろう。33 住の北東壁を棚状に掘り込んだ小穴には、韓半島南部産とみられる板状鉄斧が 2 枚重ねて納められていた。規模の大きさ・貴重品の保有から 33 住は北一本柳遺跡の環濠集落の中では階層的に上位の世帯の住まいと目される。なお、当遺跡では板状鉄斧以外に韓半島南部産の文物は見られないことから、環濠集落の住人が、三韓時代の韓半島南部と直接交流をもってもたらされた可能性は低く、弥生後期後半において韓半島南部と直接交渉した可能性が高い丹後地方など日本海側の半島を経由して間接的に佐久地域にもたらされた可能性が高い。

西一本柳遺跡の環濠は、北西から南東方向に傾く楕円形で、長軸 255m、短軸 190m 程度と推定される（図 3）。11・13～15 次調査で環濠内北部の一端が垣間見えたに過ぎず、全容が見えていないが大型堅穴住居を中心としたまとまりが環濠内に数か所あったようである。また、環濠外には、Ⅳ期の堅穴住居は構築されないようである。

北一本柳と西一本柳遺跡の環濠集落については、その一部が調査されたにすぎないが、環濠が囲繞する面積や検出された堅穴住居址の大きさは北一本柳遺跡が勝っており、並立していたとすれば北一本柳の環濠集落が階層的には優位に立っていた可能性が高い。ただし、堅穴住居址や環濠出土土器を比較すると私見ではあるが、北一本柳遺跡が古く、西一本柳遺跡が新しい様相が看取できる<sup>（註 16）</sup>ため、弥生時代末期にあたる箱清水期後半において北一本柳遺跡の大規模環濠集落からやや規模を減じた西一本柳遺跡の環濠集落への連続的な移動があったことが考えられるのである。

なお、佐久地域北部の弥生時代後期後半・箱清水期新の集落址を俯瞰すると、西一本柳遺跡一帯以外では、枇杷坂遺跡群にしかまとまった集落が見られない。弥生時代が終焉を迎える後期後半・箱清水期の段階に至って、箱清水期古までは隆盛を極めた田切り地形末端部への集住から、湯川流域の西一本柳・北一本柳遺跡への集住へと転換した軌跡がたどれるのである。

## b 墓址

五里田遺跡では出土土器が少なく時期判定が難しいが弥生後期Ⅲ～Ⅳ期と考えられる円形周溝墓 5 基が見つかった。西一本柳か北一本柳遺跡の環濠集落の墓域とも考えられる。

Ⅲ期の周防畑遺跡群宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱや枇杷坂遺跡群円正坊遺跡Ⅲの墓域は、一辺 10m 級の比較的大型の四隅の切れる方形周溝墓が共存しているため、五里田遺跡の未調査部分にもこの類の方形周溝墓が眠っている可能性がある。

副葬品としては鉄剣や銅釦・鉄釦などがある。このうち銅釦・鉄釦については、長野県埋蔵文化財センター調査の周防畑遺跡群や同遺跡群宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ、西一里塚遺跡群、後家山遺跡などで箱清水期前半＝弥生後期Ⅲ期古以降からⅣ期の周溝墓・木棺墓から一般的に出土することが解ってきた。螺旋状の鉄釦は長野盆地周辺で分布が濃いことが判明しており、佐久地域でもその流れのなかで受容していると思われる。

箱清水期前半＝後期Ⅲ期新で鉄剣を保有する墓は、長野県埋蔵文化財センターが調査した西一里塚遺跡群 SM07 木棺墓にあり、円正坊遺跡Ⅷ H37 号住居址では鉄剣とみられる鉄片が出



土している。五里田遺跡では栗林期の竪穴住居から鉄剣が出土しているが、おそらく円形周溝墓の副葬品の混入であろう。円形周溝墓は出土土器が少なく時期判定が難しいところであるが、Ⅲ～Ⅳ期で鉄剣を保有していた可能性が考えられる。丹後半島においては後期後半になると鉄剣の副葬が増えることが明らかになっており、佐久地域における弥生後期Ⅲ期（箱清水期前半）以降の墓域における鉄剣の採用は、弥生中期以降古代中国の漢や韓半島南部の加耶（弁辰）の鉄の受容をはかった丹後半島の首長の動きと無関係ではないと考えられる。特に丹後の後期後葉の台状墓には、中心埋葬に鉄剣一振りか二振り、あるいは鉞を副葬する傾向があり、鉄剣については朝鮮半島弁辰地域出土例に類するもので彼地からもたらされた可能性があるという<sup>（註17）</sup>。類するものとされる鉄剣は「短茎刃関双孔」という特徴を有する。西一里塚遺跡の SM14 方形周溝墓主体部出土鉄剣の X 線透過写真を観察すると錆びに隠れて確認しづらいが、刃関部分に並列双孔が認められるように思われる。この見方が正しければ西一里塚出土の鉄剣は丹後半島の弥生後期後半～終末の墳墓に多く副葬される形制の短剣と同類型ということになる。この X 線写真を高久健二氏に観察いただいた結果、双孔をもつ可能性大とのことであった。

五里田・西一里塚遺跡の鉄剣は、北一本柳遺跡 33 住出土板状鉄斧と同様に韓半島南部からもたらされた可能性も考えられるのである。

## 4 まとめ

### (1) 佐久地域北部の後期弥生集落の動態

湯川右岸の東西に細長い台地上に展開した西一本柳遺跡一帯の後期弥生集落の変遷をたどってみた。

弥生時代中期後半の中でもさらに後半部分の栗林 2 式新段階において、佐久地域の一大集住地となったこの遺跡一帯は、鉄器への転換に伴う<sup>えのきだ</sup>榎田型磨製石斧の手工業体制生産崩壊に伴い、一挙に拡散の方向へと向かい集落の痕跡が見られなくなる<sup>（註18）</sup>。中期末においては、ここよりも北側の田切り地形末端部の枇杷坂遺跡群直路遺跡で小規模集落が営まれていたことが確認されている。私は直路遺跡で榎田型磨製石斧が出土していることから、この遺跡を佐久地域における磨製石斧の手工業生産に関わる最終段階の集落と考えている。これ以降の時代の集落址からは、榎田型磨製石斧は出土していない。

西一本柳遺跡一帯では土器型式にして一型式程度の空白をおいて、後期Ⅰ期＝吉田期古において西一本柳遺跡の北西部で再び、一型式で約 30 軒の竪穴住居址が累積された小規模な集落を構えるようになる。このような小規模集落は、全体像がつかめないが枇杷坂遺跡群の円正坊遺跡や周防畑 B 遺跡で当該期の竪穴住居址が少数見つかっていることから、田切り地形末端部においても集落の営みが始まっていたことがわかる。

弥生後期Ⅱ期＝吉田期新になると集落が、西一本柳遺跡と北西の久保遺跡に分散する。Ⅱ期における両遺跡の竪穴住居址数の合計は、Ⅰ期とあまり変わらない。

佐久地域北部全体を見るとこの時期の集落は、周防畑 B 遺跡で土器棺墓が見つかっている。

また、枇杷坂遺跡群・円正坊遺跡でも竪穴住居址が見つかっており、Ⅰ期と比して急激に膨張している訳ではないが集落数が増えていく発展の過程を推測することができる。

弥生後期Ⅲ期古＝箱清水期古は西一本柳遺跡一帯では集落が営まれない。その主体は周防畑遺跡群に移っており、西一本柳遺跡一帯は再び一時的な空白を迎える。

弥生後期Ⅲ期新＝箱清水期古は北西の久保遺跡で23軒の竪穴住居址群が確認されている。佐久地域北部では最も集落の数が増える時期で、当該期の竪穴住居址が100軒以上みつき、国内最大級の長辺18mの大型竪穴住居址が発見された西近津遺跡群を最大規模の集落と考えられる。

このほかに同時期の集落址は、隣の周防畑遺跡群宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ、さらにその隣の長土呂遺跡群下聖端遺跡<sup>（註19）</sup>、枇杷坂遺跡群清水田・円正坊・上直

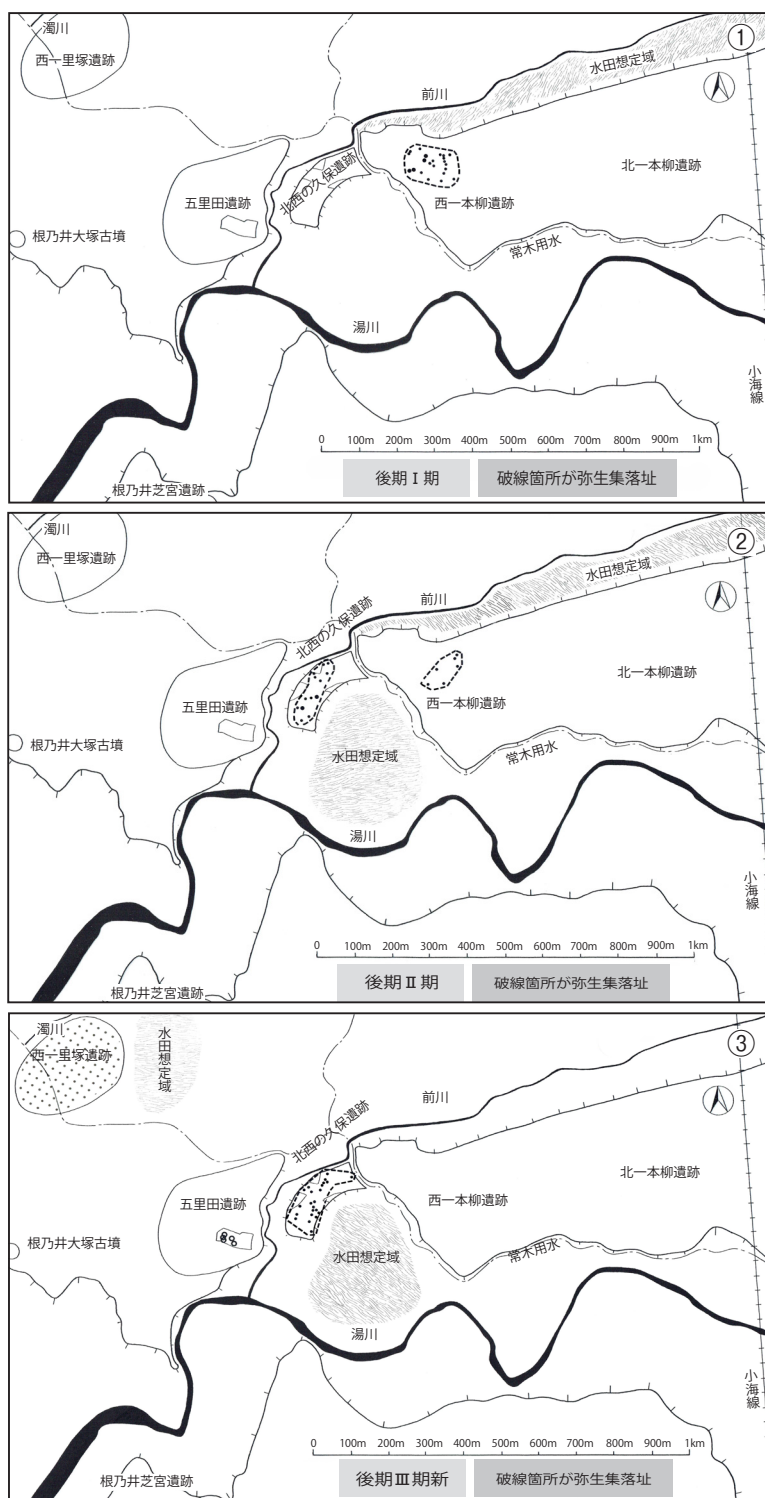


図6-1 西一本柳遺跡一帯の弥生後期遺跡の変遷

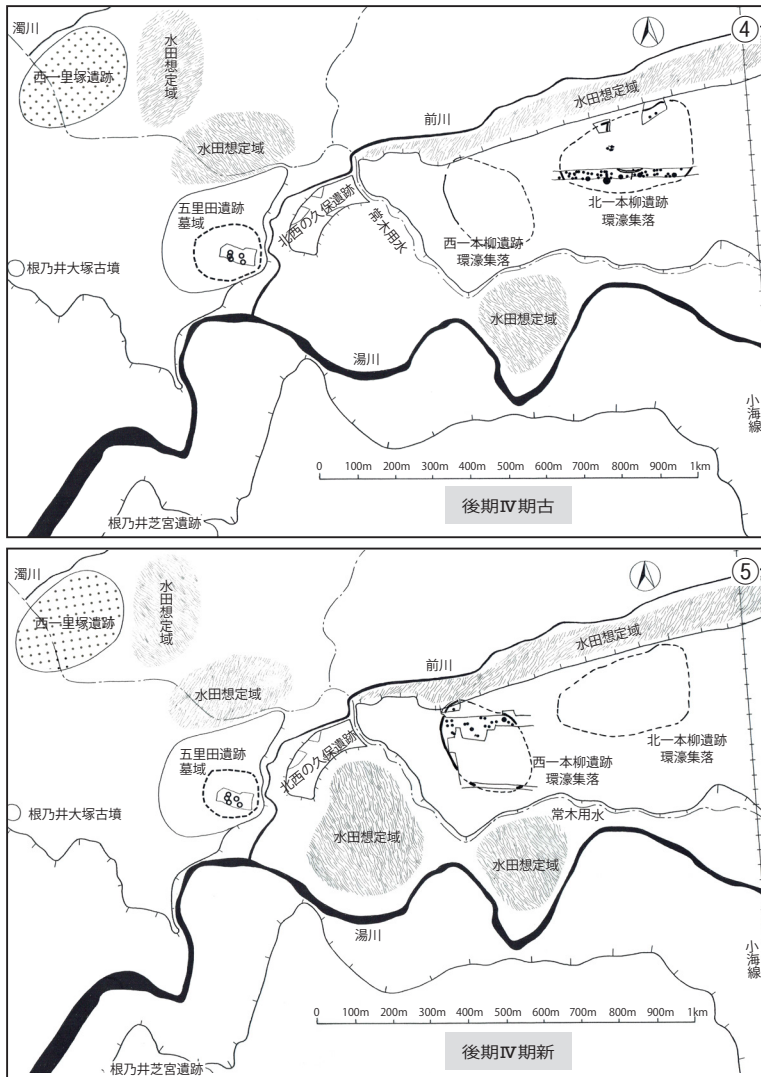


図6-2 西一本柳遺跡一帯の弥生後期遺跡の変遷

えられる。

以上を総合すると弥生後期Ⅲ期新の時期、田切り地形末端部においては東西に連なる各遺跡で、それぞれに大きな集落を営んでいた可能性が考えられるのである（図7）。その中で、若干離れた湯川沿いに営まれた北西の久保遺跡の当該期の累積 23 軒の集落は、決して大きな集落とは言えない。当該期において田切り地形末端部では、大きな集落が同時に犄めき合っているような状態であった。すべての分節集団を受入れることが不可能な状態であり、北西の久保遺跡の集落を営んだ人々は、西近津遺跡群を中心として田切り地形末端部に集住する集団から溢れた分節集団であったことも考えられる。

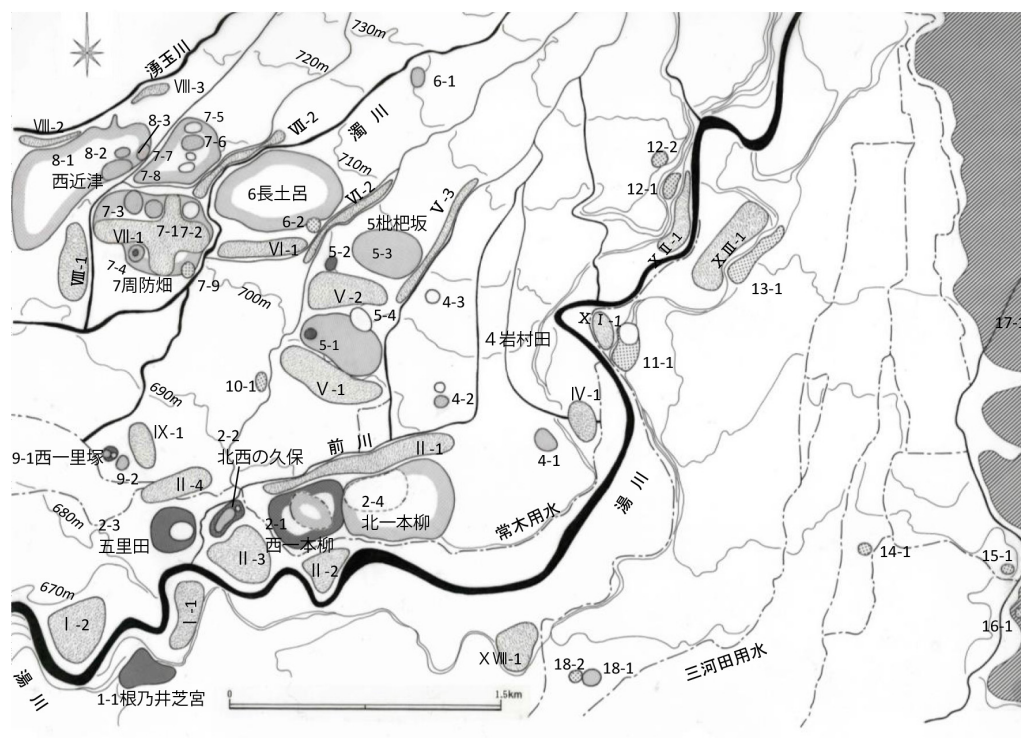
佐久地域北部の弥生後期Ⅲ期新の集落のあり方については、西近津遺跡群の正式報告を以てより明確になる。報告書刊行後再考したい。

路・琵琶坂の各遺跡などで確認されている。北西の久保遺跡に近い西一里塚遺跡群もⅢ期新の段階で集落形成のピークを迎えているようだ。各遺跡の当該期の集落規模は判明していないものが多いが、枇杷坂遺跡群や周防畑遺跡群宮の前遺跡は西近津遺跡群の規模には達しないものの、大きな規模の集落の展開が推測される。過去の調査面積が狭小ではあるが、西一本柳遺跡一帯と同じ岩村田遺跡群の北部でも、上木戸<sup>(註20)</sup>・柳堂遺跡<sup>(註21)</sup>で周溝墓が見つかったり、赤い土器が集中的に採集できる地点も存在するため、当該期の相当規模の集落が眠っている可能性が考

弥生後期Ⅳ期＝箱清水期新になると、西一本柳遺跡一帯ではそれまで空間利用されていなかった北一本柳遺跡で大規模な環濠集落が営まれる。それと同時か、あるいは連続的に 50m の距離を隔てて西一本柳遺跡でも大規模な環濠集落が営まれる。両者とも未だ調査面積が少ないため環濠内の詳細な状況は明らかでないが、北一本柳遺跡では前代の西近津遺跡と同様、床面積 100 m<sup>2</sup> を超える大型竪穴住居（推定 14.22m×7.47m＝106.22 m<sup>2</sup>）が建造されていた。この大型住居址は韓半島南部産板鉄斧など保有物にも優位性が認められるため、集落内ではより上位に位置する階層の世帯が居住していた可能性が強い。

一方、Ⅲ期新で隆盛を極めた田切り地形末端部の西近津遺跡群、周防畑遺跡群宮の前遺跡などでは大きな集落が姿を消す。枇杷坂遺跡群清水田遺跡・上直路遺跡Ⅱなどでは当該期の竪穴

濃いアミは中期集落、薄いアミは後期集落、白抜き囲いは墓、ローマ数字部分は水田想定地



#### ■弥生後期遺跡

- 2・4 岩村田遺跡群
- 2-1 西一本柳（箱清水環濠）
- 2-2 北西の久保（吉田・箱清水居住域）
- 2-3 五里田（箱清水墓）
- 2-4 北一本柳（箱清水環濠）
- 4-1 箱清水土器採集地
- 4-2 柳堂（箱清水居住域・墓）
- 4-3 上木戸（箱清水墓）
- 5 枇杷坂遺跡群
- 5-1 清水田・円正坊（吉田箱清水居住域）

- 5-2 直路（栗林3居住域）
- 5-3 上直路・琵琶坂（箱清水居住域）
- 5-4 円正坊（箱清水墓）
- 6 長土呂遺跡群
- 6-1 下聖端（箱清水居住域）
- 7 周防畑遺跡群
- 7-1 周防畑 B A 地点（吉田居住域）
- 7-2 周防畑 B B 地点（吉田墓）
- 7-3 周防畑 2/3 地区（箱清水居住域）

- 7-4 周防畑 5 地区（箱清水居住域・墓）
- 7-5～8 宮の前Ⅰ・Ⅱ（箱清水居住域・墓）
- 8 西近津遺跡群
- 8-1・2 県調査分（箱清水居住域）
- 8-3 森下（箱清水居住域）
- 9 西一里塚遺跡
- 9-1 県調査（箱清水墓）
- 9-2 市調査（箱清水環濠）
- 18-1 野馬窪（吉田居住域）

#### ■古墳前期遺跡

- 6-2 下伯母塚（居住域）
- 7-9 辻の前（居住域）
- 10-1 松の木（居住域）
- 11-1 下小平（居住域・墓）
- 12-1 栗毛坂 A（居住域）
- 12-2 栗毛坂 B（居住域）
- 13-1 腰巻（居住域）
- 14-1 池畑（居住域）
- 15-1 宿上屋敷（居住域）
- 16-1 権現平（居住域）
- 17-1 丸山Ⅱ（居住域）
- 18-2 野馬窪（居住域）

図 7 佐久地域北部 弥生時代後期（吉田～箱清水期）～古墳時代前期の遺跡分布



住居址が確認されているため、集落が全くななくなってしまっていないが、前代に比べて検出件数が少なくなっている。

長土呂遺跡群、岩村田遺跡群の状況が不明確ではあるが、集住の中心が田切り地形末端部から再び湯川右岸へ移動したことはほぼ間違いなからう。

以上をまとめると後期Ⅰ期では湯川沿い、田切り地形末端部いずれの地域でも閑散としていた佐久地域北部の遺跡は、Ⅱ期に至って徐々に拡大傾向を示し、Ⅲ期古になると田切り地形末端部の周防畑遺跡群に集住の拠点を置くようになる。この時期湯川沿いの西一本柳遺跡一帯では、今のところ居住の痕跡が認められない。

Ⅲ期新の段階では、田切り地形末端部において過去に例のない集落過密状況、人口の増加が想定されるとともに、西近津遺跡群での超大型住居の建造に象徴されるように階層的上位世帯の登場が想定される現象が目立つようになる。ただし、当該期やその前後の墓を見ると今のところ、取り立てて大規模な墓は弥生時代末まで築造されない。大きな墓は、せいぜい一辺10m強の方形周溝墓である。西近津の大型住居を含む大きな集落に対応する墓域が見つかっていない状況ではあるが、住居の大きさに比例するような大きな墓の築造に至っていなかった社会の発展段階であったのかもしれない。

この段階の湯川沿い西一本柳遺跡一帯の集落は北西の久保遺跡の23軒累積された竪穴住居群のみである。田切り地形末端部に比べると閑散とした状況であることは否めない。

Ⅳ期になると前述のように集住の拠点は、田切り地形末端部から西一本柳遺跡一帯の湯川沿いに移り、大規模環濠集落が北一本柳遺跡、西一本柳遺跡に隣り合わせて営まれた。

本稿の分析では佐久地域北部においては、一か所で安定的に大きな集落を営み続けるのではなく、1～2時期ごとに集住の拠点を移動していることが明らかになった。そして箱清水期の中盤から後半、後期Ⅲ期新からⅣ期という弥生時代の終盤に至って、100㎡を超える大型竪穴住居の建造、韓半島南部産板状鉄斧や鉄剣の保有に見られる、階層的上位世帯の出現など階級社会への傾斜を強めていく。

## (2) 今後の課題

①-1 今回は、弥生後期の各集落の内容の検討が不十分で、おおざっぱな変遷過程の復元にとどまっている。今後は、視野を拡大して佐久地域北部はもとよりそれ以外の地域の集落分析も詳細に行い、佐久地域全体の後期弥生社会の復元を試みたい。特に後期Ⅲ期新の時期は佐久地域北部と同様に南部でも後沢・舞台場・勝間原、中部では後家山遺跡<sup>(註22)</sup>など大きな集落遺跡が軒を連ねている状況である。また、佐久地域中部でも後家山遺跡にまとまった集落があるほか、平賀中屋敷遺跡なども遺物の分布状況から大きな集落遺跡の存在が予想される。後期Ⅲ期新という時期は、佐久地域の盆地平坦部の多くの場所で大きな集落が構えられた時期なのである。なぜ、その時期に佐久地域各所に集住傾向が高まったのかを明らかにしていかなければならない。

①-2 佐久地域では、弥生時代後期の長方形竪穴住居にはしばしば極端に細長い長楕円形の4本の主柱穴がみられる。この主柱穴をもつ竪穴住居の建造が盛行するのは西近津遺跡群の超大

型堅穴住居が建造される後期Ⅲ期新以降である。

この支柱穴に用いられた柱材については、宮本長二郎氏は極端に薄く仕上げた長方形の加工柱「五平柱」<sup>(註24)</sup><sup>ごひらちゅう</sup>、群馬県富岡市中高瀬観音山遺跡の弥生後期後半の堅穴住居を復元した石井榮一氏は「半裁柱」<sup>(註25)</sup>を想定している。そのいずれの柱材が採用されたのかについては後日検討するが、「五平柱」のような長方形加工柱を量産するには、鉋や斧など鉄製加工工具の存在が必要不可欠であったと考えられるし、「半裁柱」の生産にはやはり鉄製加工工具があったほうがより効率的で正確に仕上げられたと考えられ、いずれの柱材であっても鉄製加工工具の存在がその作出の背景にあったと推定される。

後期Ⅲ期新に至って佐久地域北部ではそこに集住した人々が鉄製加工工具の入手に成功した結果、「五平柱」「半裁柱」いずれかの加工柱を用いた堅穴住居の建造が流行したものと思われる。また、この時期に佐久地域では爆発的に集落数・規模が増大する現象は、木材や木器加工工具の入手によって柱材などの建築材の加工とともに鋤・鋤などの優秀な農耕具が量産された結果生じた現象と見ることも可能であろう。

五平柱を使用する住居の出現時期、分布等諸属性についても稿を改めて検討したい。

② 中期後半栗林期については、前述したように西一本柳・北西の久保・五里田遺跡では調査されただけで279軒にも及ぶ堅穴住居址が検出されている。今回、触れることができなかったが、この3遺跡における中期後半栗林期に惹き起こされた爆発的な集住現象の分析は、佐久の弥生社会を解明するためにはぜひ成し遂げなければならない課題である。

③ 西一本柳遺跡一帯は、空白時期もあるが弥生時代中期後半＝栗林期以降後期終末まで佐久地域北部の集住地の中心的存在であった。しかし、古墳時代を迎えると中期(5世紀)まで、しばらくの間一軒の居住も見いだせなくなる。古墳時代前期<sup>(註17)</sup>の集落はどこへ行ったのか。当該期の集落址は佐久市では下小平、近津、和田原、鎌田、松の木、辻の前、腰巻、栗毛坂A・B、榛名平、大ふけ、砂原、中平・田中島、小諸市では和田原、久保田遺跡、軽井沢町では県<sup>あがた</sup>遺跡、御代田町では塚田遺跡など数多い<sup>(註23)</sup>。湯川流域や田切り末端部における集落は、数はたくさんあるが、規模が極端に縮小する。そしてやはり規模の小さい集落ばかりではあるが、弥生時代にあまり集落が営まれなかった標高が高い地域への進出が顕著となる。概略すれば小規模化しての拡散が顕著になるのである。今回はこれ以上踏み込まないが、古墳前期の集落についても佐久地域全域を視野に入れて再考したい。

### (3) 埋蔵文化財行政の使命

佐久市教育委員会は昭和50年代以降、開発があるごとに丁寧な保護協議を行い、原因者に理解を得て発掘調査を積み重ねてきた。本稿ではその成果のごく一部を紹介できたにすぎないが、大小規模の調査の成果を貼り合わせるにより、今まで語ることができなかった佐久地域北部の後期弥生社会の動態を描き出すことができたのである。こういった丹念な仕事の積み重ねなくして、郷土史の復元はあり得ないことを後世に語り継いでいきたい。

最後に過密な調査スケジュールであったにもかかわらず、『西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』や『西一

本柳遺跡Ⅷ』『西一本柳ⅩⅣ・北一本柳Ⅲ』など大規模調査の成果を正確で着実にまとめ上げてきた小林真寿、森泉かよ子氏らの功績に対して敬意を表したい。本稿は、各報告書で行われた集落、竪穴住居址、土器の分析を大いに参考にして考察した。また、日頃から畏友堤隆氏には、数々の教示や文献の提供を受けている。鳥居亮氏には、本稿の図版を浄書していただいた。記して感謝申し上げる。

- 註1 小山岳夫 2014a「佐久地域後期弥生土器編年と北一本柳遺跡の年代」『佐久考古通信』113
- 註2 佐久市教育委員会 2006 「北一本柳遺跡Ⅱ調査報告書」『佐久市文化財年報14』 2006 『岩村田遺跡群宮の前遺跡』
- 2008 『岩村田遺跡群北一本柳遺跡Ⅳ』
- 2010 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅣ・北一本柳Ⅲ・東大門 先Ⅱ・西八日町Ⅲ・Ⅶ』
- 註3 佐久市教育委員会 1994 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅰ』 1995 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅱ』
- 1999 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』 2000 「西一本柳遺跡Ⅶ調査報告書」『佐久市埋蔵文化財年報8』
- 2001 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ』 2003 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅷ』
- 2004 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅸ』 2004 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅡ』
- 2005 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡Ⅹ』 2005 「西一本柳遺跡ⅩⅠ調査報告書」
- 『佐久市文化財年報13』
- 2006 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅢ』 2008 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅤ』
- 2008 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅥ』 2009 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅦ』
- 2010 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅣ・北一本柳Ⅲ・東大門先Ⅱ・西八日町Ⅲ・Ⅶ』
- 2011 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅧ』 2012 『岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅨ』
- 註4 佐久市教育委員会 1984・1987『北西の久保遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- 註5 佐久市教育委員会 1999『五里田遺跡』
- 註6 小山岳夫 2014 b「佐久地域北部の弥生集落の変遷」『考古学リーダー 23 熊谷市前中西遺跡を語る—弥生時代の大規模集落—』
- 註7 佐久市教育委員会 2003「第Ⅵ章枇杷坂遺跡群直路遺跡ⅠⅡⅢ」『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 註8 小山岳夫 1999『シンポジウム長野県の弥生土器編年』
- 註9 長野県埋蔵文化財センター 2014『周防畑遺跡群』
- 註10 柳澤亮他 2006「(12)西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報23』長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤亮他 2007「(6)西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報24』長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤亮他 2008「(5)西近津遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報24』長野県埋蔵文化財センター
- 註11 佐久市教育委員会 2012『周防畑遺跡群宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- 註12 佐久市教育委員会 1996「清水田遺跡調査報告」『佐久市埋蔵文化財文化財年報4』
- 2003「枇杷坂遺跡群清水田遺跡Ⅱ」『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』

- 1997『円正坊遺跡Ⅱ』 2002『円正坊遺跡Ⅳ』 2007・2008「円正坊遺跡Ⅵ調査報告書」『佐久市文化財年報 15・16』
- 2008・2009「円正坊遺跡Ⅶ調査報告書」『佐久市文化財年報 17・18』 2011『円正坊遺跡Ⅷ』『円正坊遺跡Ⅸ』
- 註 13 佐久市教育委員会 1986『枇杷坂遺跡』 1998「上直路遺跡調査報告書」『佐久市埋蔵文化財文化財年報 6』 2007『上直路遺跡Ⅱ』『上直路遺跡Ⅲ』
- 註 14 長野県埋蔵文化財センター 2012『濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』
- 註 15 森泉かよ子 2014「板状鉄斧を出土した見た一本柳遺跡Ⅲと H33 号住の概要」『佐久考古通信』113
- 註 16 前掲註 (1)
- 註 17 野島永 2002「丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって」『青いガラス燦き』大阪府立弥生文化博物館
- 註 18 馬場紳一郎 2013「信州における弥生社会のありかた - 青銅器の受容と農耕祭祀 -」
- 註 19 佐久市教育委員会 1992 「下聖端遺跡」『国道 141 号線関係遺跡』
- 註 20 佐久市教育委員会 2002 『上木戸遺跡』
- 註 21 佐久市教育委員会 2002 『柳堂遺跡』
- 註 22 佐久市教育委員会 1983 『舞台場』 臼田町教育委員会 1987 『勝間原遺跡』 佐久市教育委員会 2004 『後家山遺跡』
- 註 23 廣瀬昭弘 2013「8 総括」『鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群』長野県埋蔵文化財センターに弥生後期～古墳前期の遺跡分布が示されている。
- 註 24 宮本長二郎氏のご教示。
- 註 25 石井榮一 1995 「弥生後期大型竪穴式建物の復元」『中高瀬観音山遺跡』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第 194 集